

図書館で調べてみよう。

図書館にいけば、「東はりまの民話」(神戸新聞出版センター発行)や「郷土のおはなしとうた」(加古川市教育委員会発行)、「郷土の民話」(兵庫県学校厚生会発行)、「ふるさとの民話」(社団法人加古川青年会議所発行)などの本を見ることが出来る。これらの本をもとに、その民話が語られている場所にじっさいに足を運んでみよう。

実際にその場所へ行ってみよう!

民話の舞台となった場所で、近所のおばあさんやおじいさんに話を聞いてみると、また別のお話があったりして、さらに謎が深まるぞ。また歴史などと照らしあわせてみたら面白いぞ。

もっと広い範囲でも調べてみよう。

インターネットなどでさらに広範囲に調べてみよう。全国にある民話や昔ばなしと共通点とかが見つかるかもしれないぞ。陰陽師伝説(おんみょうじでんせつ)は、小説や漫画、映画なんかもなっているけど、加古川にその話が伝わっているなんてロマンを感じるよね。

民話の謎を解くのは誰だ?

加古川には、この地区にのっている以外にも、まだまだ面白い民話や昔ばなしがあるぞ。

みんなも、もっともっと調べてみよう。

ほっこかかわのホームページでも加古川の民話や昔ばなしを紹介してるぞ。 <http://www.hotkagawa.com/minwa/>



八幡神社(西条山手)



↑↓常楽寺(上荘町)



↓春日神社(加古川)



↑春日神社(加古川)



↑大歳神社(東神吉町)



↑大歳神社(東神吉町)



↑春日神社(加古川)



加古川の民話地図





民話の舞台をたずねてみよう！

皆さんは民話と聞くと何を思うかべますか？

むかしむかしで始まる、ほのぼのとしたおはなし？あるいは、全国的に有名は桃太郎や、さるかに合戦のようなおはなしかもしれません。

この加古川民話地図は、加古川に伝わる民話を地図にしたものです。

民話という、現実にはありえないようなおはなしが多いですが、実際にその民話の舞台となっている場所に足を運んでみると、そこにはその民話の断片のような石碑や、お地蔵さん、お堂などが残っていたりします。

また、同じ登場人物が、いろんなところで別におはなしになっていることもあります。加古川の民話でいうなら、ほうどうせんじん 法道仙人や、あんみょうじ 陰陽師の阿部清明やあしやどうまん 芦屋道満などです。

ほうどうせんじん 法道仙人のお話は、どれも空を飛んだといわれる仙人のエピソードとなっています。加古川の米田という地名も、ほうどうせんじん 法道仙人の術で空を飛んでいた米俵が、よねだ 墮ちた場所、米が墮ちた「米墮」が語源だという説もあつたりします。

あんみょうじ 陰陽師のあべのせいめい 阿部清明やあしやどうまん 芦屋道満のおはなしは、小説や映画などにもなっていたりして、そのふるさとが加古川のこの地であるなんて、少し自慢したくなります。

このように民話は、たんなる作り話ではなくて、その場所、その時代に何かあったことが、人から人へと現代にまで伝わっていったものがたりなのです。

この地図は、そういったものがたりの舞台を、マップとして製作しました。地図の上では書ききれないため、物語の詳しい話は載せていません。

どのお話も、とても面白いので、ぜひ調べてみたり実際にその舞台である場所にいらしてみてください。

また、この地図に載っていない民話の舞台となっている場所はまだまだたくさんあります。

たとえば、いつも学校へいく道にある小さな祠にも、もしかしたらこういったお話が伝わっているかもしれません。

近所のおじいちゃんやおばあちゃんなら、そういったお話を知っているかもしれませんよ。

みどころ

民話の舞台をたずねる時に、周りをよく見回してみよう。民話にはふれられていないけれど、なにやら想像力をかきたてられるものがたくさん発見できるぞ。気になったものは、さらに自分で調べてみよう。



神社の境内は、アートな空間だ！昔の合戦の様子を描いた絵だが、かかげられているぞ。上の絵なんかは、かなりリアルな合戦の様子が描かれている。(写真：東神吉の常楽寺)



神社のこまいぬも、その神社によってさまざま。上のこまいぬは、背中の上に子どものこまいぬが乗っている。(写真：神野町の稲根神社)

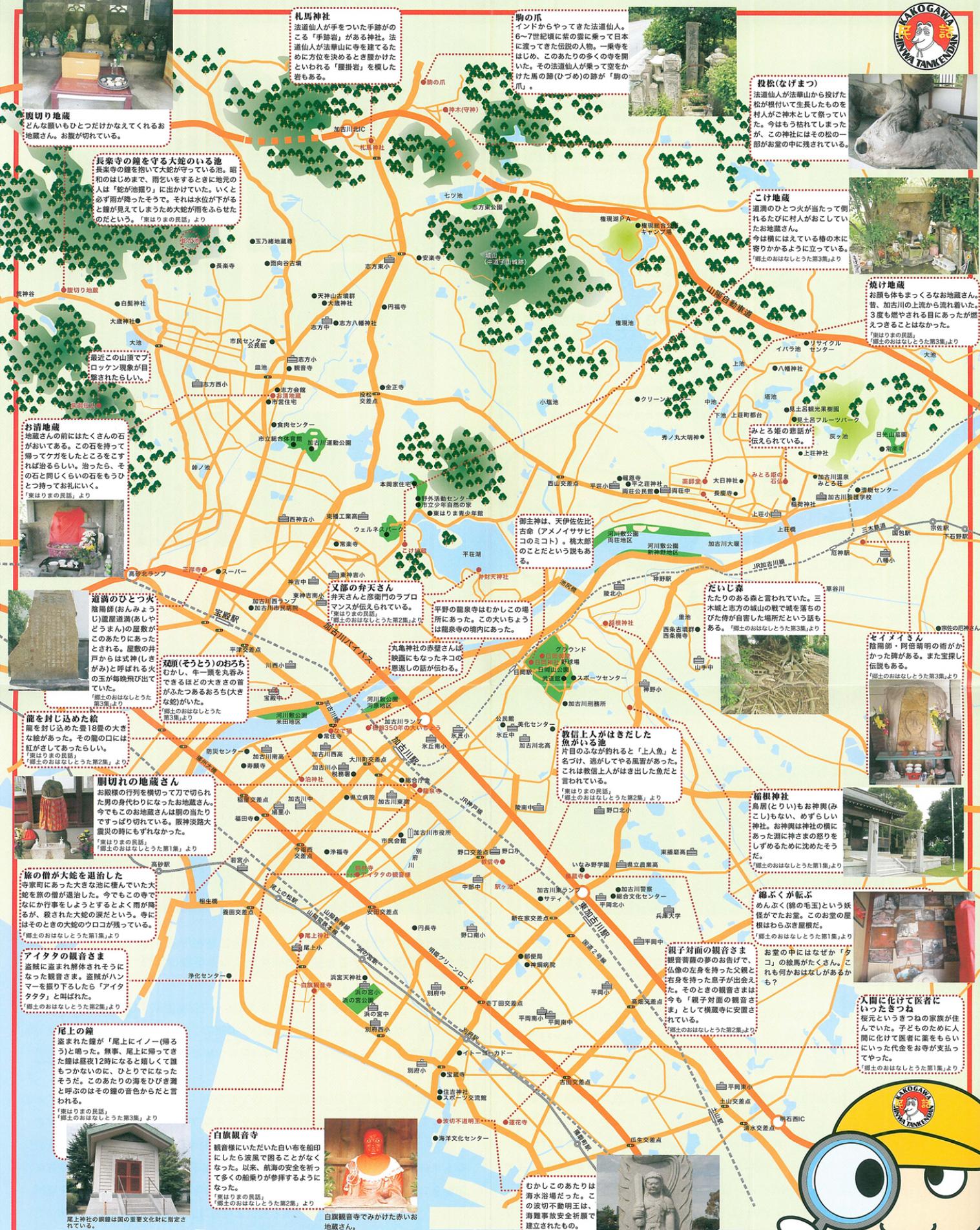


お寺は、小さなつくりにも特徴があるぞ。この写真は龍泉寺の門の上に彫られた龍。見落としがちなところに意外なものがあるぞ。(写真：加古川町の龍泉寺)



「めんぶく」が出るお堂のはわらぶき屋根だった。上や下や、いろんな角度から見てみると、面白い発見がある。(写真：神野町のお堂)

加古川の民話地図



札馬神社
法道仙人が手をついた手跡がある「手跡岩」がある神社。法道仙人が法華山に寺を建てたために方位を決めるときにかけたといわれる「腰掛岩」を模した岩もある。

駒の爪
6~7世紀頃に葉の裏に集って日本に運ってきた伝説の人物、一頭等をはじめ、このあたりで多くの寺を開いた。その法道仙人が集って置かれた馬の蹄(むづめ)の跡が「駒の爪」。

投松(なげまつ)
法道仙人が法華山から投げた松が根付いて生長したものを村人がご神木として祭っていた。今はもつれてしまったが、この神社にはその松の一部がお堂の中に残されている。



腹切り地蔵
どんな願いもひとつだけかなえてくれるお地蔵さん。お腹が切れている。

長楽寺の鐘を守る大蛇のいる地蔵
お堂の鐘を盗んで大蛇が守っている。蛇は蛇が地蔵の目を出かして、雨をいすときに地元の人は「蛇が地蔵り」に出かけていた。いくつ雨も降ったそう。それは水位が下がると鐘が見えなくなるため大蛇が雨をふらせたのだという。「東はりまの長話」より

こけ地蔵
道満のひつ火が当たって倒れるたびに村人がおこしていたお地蔵さん。今は横にはえている木の木に寄りかかろうと立っている。「東はりまの長話」より

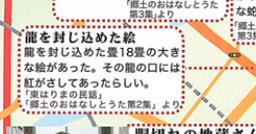


焼け地蔵
お堂もまっかるな地蔵さん。加古川の上流から流れ着いた3層も焼ける目にあつたが焼えずきることなかった。「東はりまの長話」より

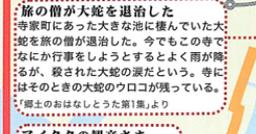
お清地蔵
地蔵さんの前にはたくさんの石がおいてある。この石を持って帰ってカガをしたところをこすれば治るらしい。治ったら、その石と同じく石をもつひとつ持ってお礼に行く。「東はりまの長話」より



道満のひつ火
陰陽師(おんみょうい)直道道満(あしどうまん)の屋敷がこたあたりであつたとされる。屋敷の井戸からは式神(しき)がみかき呼ばれる火の玉が毎晩飛び出た。「東はりまの長話」より



龍を封じた地蔵
龍を封じた地蔵。龍の大きな口が紅がさしてあつた。「東はりまの長話」より



麻の僧が大蛇を退治した
寺家町にあつた大きな池に棲んでいた大蛇の首を僧が退治した。今でもこの寺でなにか行事をしようとするときよく雨が降るが、殺された大蛇の涙だといふ。寺にはそのときの僧のウロコが残っている。「東はりまの長話」より

アイタタの観音さま
盗賊に盗まれた観音さま。盗賊がハンマーを振り下した「アイタタ」と叫んだ。「東はりまの長話」より

尾上の鐘
盗まれた鐘が「尾上にイノー(陽う)と鳴った。無事、尾上に鳴つてきた鐘は昼夜12時になると鳴つて誰もつかないのに、ひとりになつたそう。このあたりの海をひびきと呼ぶのはその鐘の音からだといわれる。「東はりまの長話」より



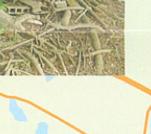
白旗観音寺
観音様にいただいた白い布を船印にしたら波風で困ることがなくなった。以来、航海の安全を祈つて多くの船乗りが参拝するようになった。「東はりまの長話」より



わかしのあたり
海水浴場だつた。この波切不動明王は、海難事故安全祈願で建立されたもの。



だじ森
たたりのある森と言われている。三木城と志方の城山の戦で城を落したのびた侍が自害した場所だといふ話もある。「東はりまの長話」より



教信上人がはきだした魚がいの池
片目のふなが釣れると「上人魚」と名づけ、遊がしてやる風習があつた。これは教信上人がはき出した魚だとされている。「東はりまの長話」より

稲楯神社
鳥居(とりい)もお神輿(みこし)もない、めずらしい神社。お神輿は神社の横にあつた池に神さまの怒りをしめるために沈めたそう。「東はりまの長話」より

綿ぶくが転ぶ
めんぶく(綿の毛玉)という妖怪がでたお堂。このお堂の屋根はわらぶき屋根だ。「東はりまの長話」より

親子対面の観音さま
観音菩薩の夢のお告げで、仏像の左手を持った父親と右手を持った息子が出会えた。そのときの観音さまは今も「親子対面の観音さま」として稲楯神社に安置されている。「東はりまの長話」より

大團に化けて医者にいったきつね
死んでしまったきつねの家族が住んでいた。子どものために人間に化けて医者にかかるといふ代金をお寺が支つてやった。「東はりまの長話」より



セイダイさん
阿倍朝臣の袴がかった跡がある。また宝珠も伝説もある。「東はりまの長話」より



大團に化けて医者にかかるといふ代金をお寺が支つてやった。



大團に化けて医者にかかるといふ代金をお寺が支つてやった。



大團に化けて医者にかかるといふ代金をお寺が支つてやった。



加古川の民話地図

